

小委員会におけるこれまでの取組等の概況について

第30回有明海・八代海等総合調査評価委員会（以下「委員会」という。）において、小委員会の設置を決定した。これに基づき、

- ・生物・水産資源・水環境問題検討作業小委員会（以下「生物問題小委」という。（委員名簿は別添1））
- ・海域再生対策検討作業小委員会（以下「海域再生小委」という。（委員名簿は別添2））

を各3回開催し、情報の収集、整理、分析を進めてきた。

両小委員会におけるこれまでの取組等の概況について報告する。

1. 当面の作業の進め方等の確認（第1回、両小委員会共通）

（1）作業方針について

生物問題小委、海域再生小委ともに、次の作業方針で作業を進めていくことを確認した。

- ① 委員会が平成18年12月に作成した委員会報告の整理をベースにしながら「自然環境」や「水産資源」について整理する。
- ② 委員会の審議の流れに沿って作業を進めることとする。また、作業の進捗状況等を随時委員会に報告し、委員会の指示を受けつつ作業を進める。
- ③ 両小委員会が作業を進める上で生じる重複について、収集する情報に関する重複は、事前に両小委員会間で調整し、収集する情報の重複を避けるとともに、収集した情報は両小委員会で共有化を図る。また、整理、分析段階での重複は、両小委員会間で調整は行わない。

（2）両小委員会の作業分担・流れ

生物問題小委、海域再生小委が行う作業について、収集する情報の重複等を避けるため、便宜上の整理（別添3）を確認するとともに、当面の作業の流れ（別添4）について確認した。

（3）情報の収集方針

上記（2）の作業分担の下、それぞれの小委員会が収集すべき情報項目

等について確認した。事務局において、同方針に基づき、「有明海及び八代海等を再生するための特別措置に関する法律」（以下「特措法」という。）第18条第1項に基づき、主務省庁及び関係県が行った調査結果について収集することとなった。（生物問題小委の情報収集方針は別添5、海域再生小委の情報の収集方針は別添6）

また、両小委員会間の情報の共有化の目的から、収集した報告書等は、両小委員会委員間で共有化を図ることとした。

2. 情報の収集方針に基づく情報収集について

上記1.（3）に基づき、特措法の主務省及び関係県が実施した調査の中から、平成18年の委員会報告で提言された「具体的再生方策」（報告書78～80頁）、「解明すべき課題（重点化を図るべき研究課題）」（報告書80頁）に対応する調査結果の収集を行った。

これまでにのべ453件の報告書等を収集し、2月中旬、小委員会委員に配布した。（報告書等の情報収集状況は別添7のとおり。）

3. 生物問題小委における情報の収集、整理、分析について（第2回、第3回）

生物問題小委においては、情報収集方針の中から、当面の情報収集優先項目として、「有明海の有用二枚貝類」を、その次の優先事項として「赤潮」とすることとした。

事務局による主務省及び関係県が実施した調査に係る情報収集が進まない状況の中で、委員が、関係県等の協力を得て別途収集した情報を下に、有明海の有用二枚貝類に係る現況、現況の問題点、問題点の原因要因等について調査検討を進めた。

（これまでの検討状況については、**資料2－3**のとおりである。）

4. 海域再生小委における情報の収集、整理、分析について（第2回、第3回）

海域再生小委においては、情報収集方針の中から、当面の情報収集優先項目として、「海洋構造」、「水質環境（海域）」、「底質環境（海域）」、「生物生態系」の4項目について、地域別に収集することとした。

事務局による主務省及び関係県が実施した調査に係る情報収集が進まない状況の中で、事例報告として、環境省及び国土交通省（港湾部局）から優先4項目に関連し現在実施中の調査の途中経過、また熊本県から過去に実施した取組結果について報告を受けた。

また、今後の検討の進め方として、次の（1）～（3）について確認した。

(1) 有明海及び八代海

「海洋構造」、「水質環境（海域）」、「底質環境（海域）」、「生物生態系」の優先4項目を中心に、次の①～⑤の手順で、作業・検討を進めるここと。

- ① 環境省及び国土交通省から調査結果として示された有明海、八代海を底質状態、底生生物の特徴で分類し同分類毎に環境特性を整理した整理表、同分類等を基に区分けした海域区分図を今後の検討のベースとする（有明海は別添8、八代海は別添9）。
- ② ①の区域毎の現況の問題点、問題点の原因要因について、海域再生小委委員の意見、生物問題小委の整理を基に事務局において仮説を立てる。
- ③ 同仮説に基づき、これまでに事務局が収集した国及び県から提出を受けた報告書等成果から仮説を検証する。
- ④ ③の結果、必要があれば、区域の見直し、現況の環境特性の修正を加える。
- ⑤ 各区域毎の現況を踏まえた環境特性の整理が終了した段階で、区域毎に連関図（H18年の委員会報告に基づく問題点の原因要因の関係図（委員会報告42、43頁））を作成する。

(2) 橘湾等

現状で検討に必要な情報が収集できていないことから、今後、同海域で実施される環境測定調査結果等を収集し、データを蓄積した上で、問題点の有無等を判断することとする。

(3) 生物問題小委からの協力依頼への対応

生物問題小委における調査検討の中で、本小委員会の委員に関連分野の有識者委員がいる場合や、役割分担上、本小委員会に整理された事項に関する場合、意見照会を求められるケースが見られたため、引き続き、このようなケースに本小委員会の審議に支障の無い範囲で、協力していくこととする。

5. 当面の検討スケジュール案について

(1) 生物問題小委

- ① 有明海の有用二枚貝類 → 検討の継続
- ② 赤潮（有明海、八代海等） → 第4回、第5回
- ③ 貧酸素水塊（有明海） → 第5回、第6回

①～③にかかる中間とりまとめ → 第7回

※ 以上その他、隨時、海域再生小委の取組みに必要な協力を行う。

(2) 海域再生小委

① 有明海及び八代海海域区別の環境特性の整理 → 第4～6回

② ①にかかる中間とりまとめ → 第7回

※ 以上その他、隨時、生物問題小委の取組みに必要な協力を行う。

(3) 開催スケジュール（見通し）

時期	
平成25年6月頃	第4回小委員会
9月頃	第5回小委員会
12月頃	第6回小委員会
平成26年2月頃	第7回小委員会

<参考資料>

（参考1）生物・水産資源・水環境問題検討作業小委員会の議事概要

（参考2）海域再生対策検討作業小委員会の議事概要

（参考3）環境省が実施した底質・底生生物データ等に基づく区分案作成の試行について（有明海の例）

**生物・水産資源・水環境問題検討作業小委員会
委員名簿**

氏 名		現 職 等
委員 ◎ 有瀧 真人	ありたき まさと	独立行政法人 水産総合研究センター西海区水産研究所有明海・八代海漁場環境研究センター センター長
委員 岩渕 光伸	いわぶち みつのぶ	福岡県水産海洋技術センター企画管理部 部長
委員 古賀 秀昭	こが ひであき	佐賀県有明水産振興センター 所長
委員 速水 祐一	はやみ ゆういち	佐賀大学低平地沿岸海域研究センター 准教授
委員 本城 凡夫	ほんじょう つねお	香川大学瀬戸内圏研究センター 特任教授
委員 山本 智子	やまもと ともこ	鹿児島大学水産学部 准教授
専門 梅崎 祐二	うめざき ゆうじ	熊本県水産研究センター 所長
専門 大村 浩一	おおむら こういち	福岡県水産海洋技術センター有明海研究所 所長
専門 田添 伸	たぞえ のぼる	長崎県総合水産試験場 場長
専門 福留 己樹夫	ふくどめ みきお	鹿児島県水産技術開発センター 所長
専門 松山 幸彦	まつやま ゆきひこ	独立行政法人 水産総合研究センター西海区水産研究所有明海・八代海漁場環境研究センター グループ長

◎は委員長

海域再生対策検討作業小委員会
委員名簿

	氏　　名	現　　職　　等
委員	有瀧 真人	独立行政法人 水産総合研究センター西海区水産研究所有明海・八代海漁場環境研究センター センター長
委員	小松 利光	九州大学大学院工学研究院 特命教授
委員	◎ 滝川 清	熊本大学沿岸域環境科学教育研究センター センター長・教授
委員	山口 敦子	長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科 教授
委員	山口 啓子	島根大生物資源科学部 准教授
臨時	清水 晃	森林総合研究所九州支所 地域研究監
専門	白谷 栄作	農業・食品産業技術総合研究機構農村工学研究所企画管理部 業務推進室 室長
専門	橋本 晴行	九州大学大学院工学研究院 准教授
専門	古川 恵太	国土技術政策総合研究所沿岸海洋・防災研究部 沿岸海洋新技術研究官
専門	牧 秀明	国立環境研究所地域環境研究センター海洋環境研究室 主任研究員
専門	松野 健	九州大学応用力学研究所 教授

◎は委員長

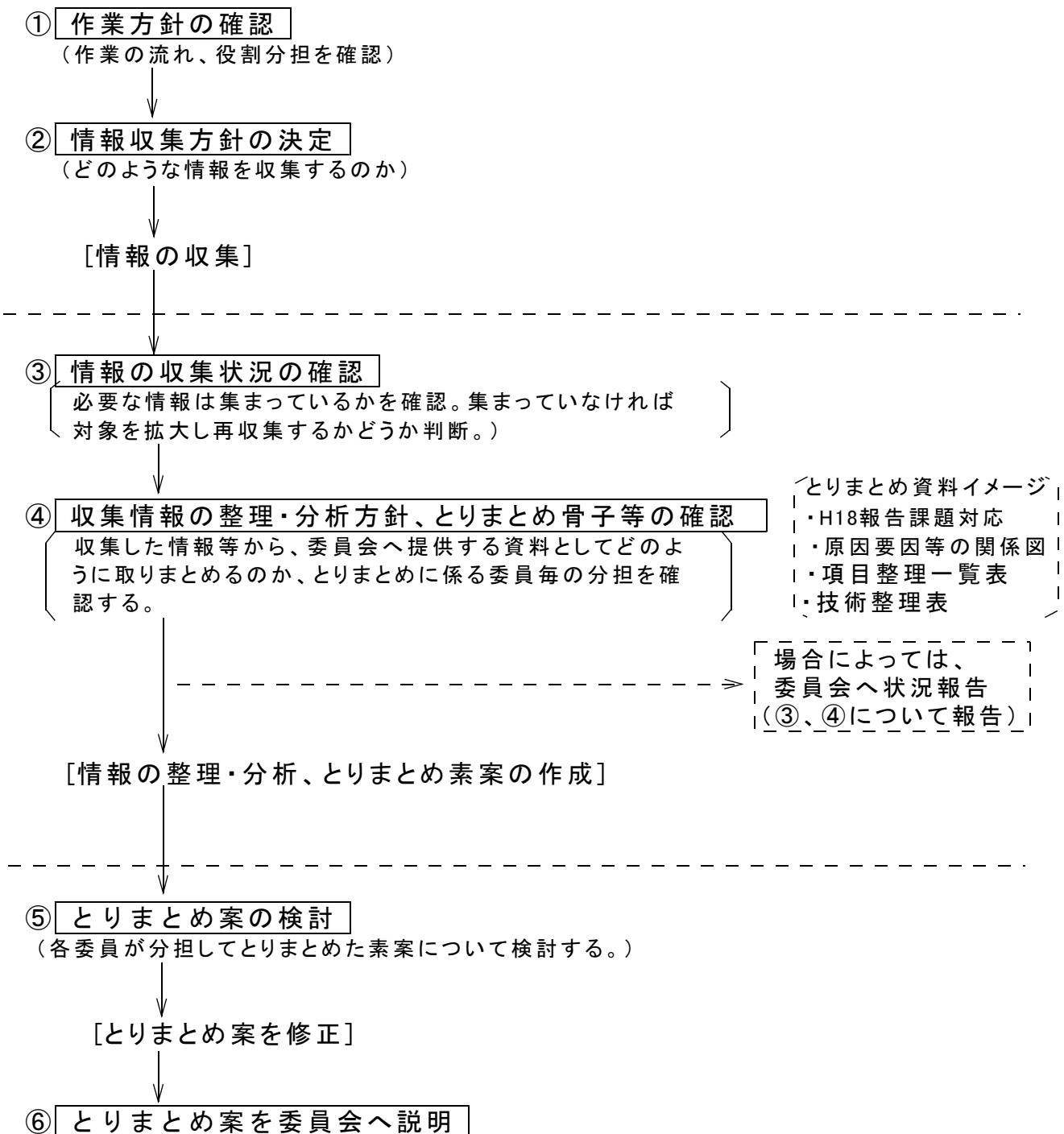
生物問題小委、海域再生小委の情報収集にかかる役割分担表

		生物問題小委	海域再生小委
分担		水産資源	自然環境
対象 生物 ・ 環 境 等 技 術 そ の 他	生 物 ・ 環 境 等 技 術 そ の 他	<ul style="list-style-type: none"> ○水産資源（重要水産資源 ・ 養殖業対象生物及びそ の餌料生物） ○漁場環境（赤潮・貧酸素 水塊を含む。） ○漁場改善技術 ○増養殖技術、 ○赤潮・貧酸素水塊被害予 防・防除技術 ○漁業・養殖業 ○関連施策（規制、振興策 等） 	<ul style="list-style-type: none"> ○生物生態系 ○海域環境（水質・底質環 境、海域に流入する陸域 部分を含む。） ○自然再生（又は活性化） 技術 ○負荷管理技術 ○環境管理（又は順応的管 理）システム ○関連施策（規制、振興策 等）

なお、両小委員会が収集した情報は、両小委員会間で情報の共有化を進
めることとする。

小委員会の作業の流れ

小委員会の当面の目標として、有明海及び八代海等を巡る現況及び問題点、問題点の原因・要因究明、発生機構等の情報、再生等の技術情報を委員会に提出するための作業の流れを示したものである。



情報収集方針について

対象海域における水産資源としての重要性や対象海域に問題事象の発生状況、平成18年の委員会報告の整理等を踏まえた上で、当面の情報収集範囲は次の通りとする。

1. 有明海

項目	収集内容	実施機関	調査期間
有用二枚貝 (特にタイラギ、アサリ、ハマグリ、サルボウ、カキ、アゲマキ、)	①生息域 ②生息状況(密度、生残率、サイズ、成熟度、外観、検鏡等) ③漁業種類、漁獲場所、漁獲量・サイズ ④底質状態等漁場環境 ⑤生態・食性・餌料生物 ⑥幼生発生量・着底状況 ⑦食害生物の状況 ⑧対策技術(漁場改善、増殖(技術内容と実施状況)) ⑨その他(採捕規制等)	国及び関係県 (必要があれば漁連・漁協まで対象拡大)	平成17年以降に実施したものの ただし委員会報告に未記載の事項は遡り可能な範囲以降
有用魚介類の漁業と増殖 (特にクルマエビ、ガザミ、マダイ、ヒラメ)	①分布、回遊、産卵場・育成場(種別) ②資源量・資源状態(又は漁獲量) ③対象漁業(漁法、時期、漁場、サイズ) ④食性・捕食者 ⑤産卵場・育成場環境 ⑥対策技術(種苗生産・放流(技術内容と実施状況:時期、場所、サイズ)) ⑦⑧を実施した結果(回収率、混入率) ⑨その他(漁業規制等)		
魚介類養殖	①養殖場所・養殖時期(種別) ②赤潮被害発生状況(魚介類種別、プランクトン種別、発生範囲、死因) ③疾病発生状況(魚介類種別、疾病種別、発生範囲、死因) ④餌料(種類・回数・量) ⑤対策技術(ワクチン投与、投薬、赤潮被害予防、防除(技術内容と実施状況)) ⑥その他(養殖施設の形状、規制等)		
ノリ養殖	①色落ち発生状況(発生条件、発生場所、発生期間) ②色落ち解消状況(解消条件、解消理由) ③漁場環境(水温・塩分・栄養塩濃度、プランクトン量) ④対策技術(付着藻類対策、栄養塩不足対策、疾病対策、品質向上対策(技術内容と実施状況)) ⑤その他(操業パターン、規制等)		
赤潮	①発生密度、発生時期、発生場所(種別) ②発生時(発生前)の漁場環境(水温・塩分・栄養塩等)、気象条件 ③被害水産生物(種類・量・サイズ・死因等) ④増殖速度・増殖条件 ⑤競合生物・捕食生物 ⑥シスト分布・孵化条件 ⑦対策技術(発生予防、被害予防・軽減(技術内容及び実施状況)) ⑧その他	国及び関係県 (必要があれば漁連・漁協まで対象拡大)	同上
貧酸素水塊	①発生時期、発生場所、溶存酸素濃度 ②発生時(発生前・発生中)環境・気象条件 ③解消時環境・気象条件 ④対策技術(濃度上昇、発生予防、被害軽減、予測、待避(技術内容と実施状況)) ⑤その他		
定期観測等	①浅海定線調査 ②公共用水域水質測定調査 ③その他(上記以外で国又は関係県が定期的又は常時測定している調査(公表データ)のうち必要と思われる情報等)	国及び関係県	同上

2. 八代海

項目	収集内容	実施機関	調査期間
有用二枚貝 (特にアサリ、タイラギ、ハマグリ、サルボウ)	有明海と同じ	有明海と同じ	平成17年以降に実施したものの ただし委員会報告に未記載の事項は遡り可能な範囲以降
有用魚介類の漁業と増殖 (特にクルマエビ、ガザミ、マダイ、ヒラメ)	有明海と同じ		
魚介類養殖	有明海と同じ		
ノリ養殖	有明海と同じ		
赤潮	有明海と同じ	有明海と同じ	同上
貧酸素水塊	有明海と同じ		
定期観測等	有明海と同じ	有明海と同じ	同上

3. 橋湾

項目	収集内容	実施機関	調査期間
有用魚介類の漁業と増殖 (特にクルマエビ、ガザミ、マダイ、ヒラメ)	八代海と同じ	有明海と同じ	平成17年以降に実施したものの ただし委員会報告に未記載の事項は遡り可能な範囲以降
魚介類養殖	八代海と同じ		
赤潮	有明海と同じ	有明海と同じ	同上
貧酸素水塊	有明海と同じ		
定期観測等	有明海と同じ	国及び関係県	同上

<留意点>

大学等研究機関の情報については、本小委員会が予め整理上不可欠であると認めた文献を除き、原則、国及び関係県の情報だけでは該当項目に関する情報が得られない場合や情報量が不足する場合に論文等の文献を収集することとする。

(海域再生対策検討作業小委員会 決定)

情報収集方針について

平成18年の委員会報告の整理等を踏まえた上で、当面の情報収集範囲は次の通りとする。（有明海・八代海・橘湾で共通）

分類	項目	収集内容	収集先 (調査実施機関)	収集対象 調査期間
生態系	生物生態系	①種名・種類数・資源量・資源状態 (密度、生残率、サイズ、成長段階・成熟度、外観、検鏡等) ②分布、回遊、産卵場・育成場(種別) ③漁業種類、漁獲場所、漁獲量・サイズ ④生態・食性・餌料生物 ⑤産卵場・育成場環境 ⑥卵稚仔・幼生発生量 ⑦生態系バランス ⑧対策技術 ⑨関連施策(規制・振興策)等	国及び関係県 (大学等研究機関)	平成17年以降 に実施したも の
	地形(藻場 ・干潟・カキ 礁・海岸植 生・自然海 岸)	①面積、形状 ②生物種・生物量 ③機能(環境浄化、緩衝、生物生産・生物保護) ④対策技術 ⑤関連施策(規制・振興策)等		
	水質環境 (陸水・海水)	①水温 ②塩分 ③pH ④DO ⑤透明度 ⑥SS ⑦栄養塩類・重金属 ⑧クロロフィルa ⑨対策技術 ⑩関連施策(規制・振興策)等		
	汚濁負荷	①流入負荷量(河川別) ②排出負荷量(発生源別) ③直接負荷量(降雨、養殖、底質溶出、外海との交換) ④対策技術 ⑤関連施策(規制・振興策)等		
	水質・底質環境	①水深(海底地形) ②流向・流速 ③比重(水温・塩分) ④潮位・振幅 ⑤成層構造・内部潮汐 ⑥滞留時間 ⑦対策技術 ⑧関連施策(規制・振興策)等		
その他	河川構造	①水位 ②流量(出水時・平常時・渴水時) ③ダム堆砂量 ④河床(標高・幅、材料(粒径別)) ⑤土砂排出(量・粒径別) ⑥対策技術 ⑦関連施策(規制・振興策)等	同上	同上
	底質環境	①粒度・含水率 ②化学的性状 ③堆積量・堆積速度 ④浮泥(分布、厚さ、物理的性状、化学的性状) ⑤対策技術 ⑥関連施策(規制・振興策)等		
	森林	①森林面積(針葉樹・広葉樹別、樹種別、伐採放棄地、要間伐森林) ②対策技術 ③関連施策(規制・振興策)等		
	定期調査	①公共用水域水質測定調査 ②その他(上記以外で国又は関係県が定期的又は常時測定している調査(公表データ)のうち必要と思われる情報等)	国及び関係県	同上
	その他	①気象(気温、風向・風速、降水量、台風) ②ゴミ(浮遊ゴミ、海底ゴミ、漂着ゴミ) ③流出油 ④対策技術 ⑤環境管理システム ⑥順応的管理システム ⑦関連施策(規制・振興策)等	国及び関係県 (大学等研究機 関)	同上

<留意点>

大学等研究機関の情報については、本小委員会が予め整理上不可欠であると認めた文献を除き、原則、国及び関係県の情報だけでは該当項目に関する情報が得られない場合や情報量が不足する場合に論文等の文献を収集することとする。

報告書等の情報収集状況（出処別）

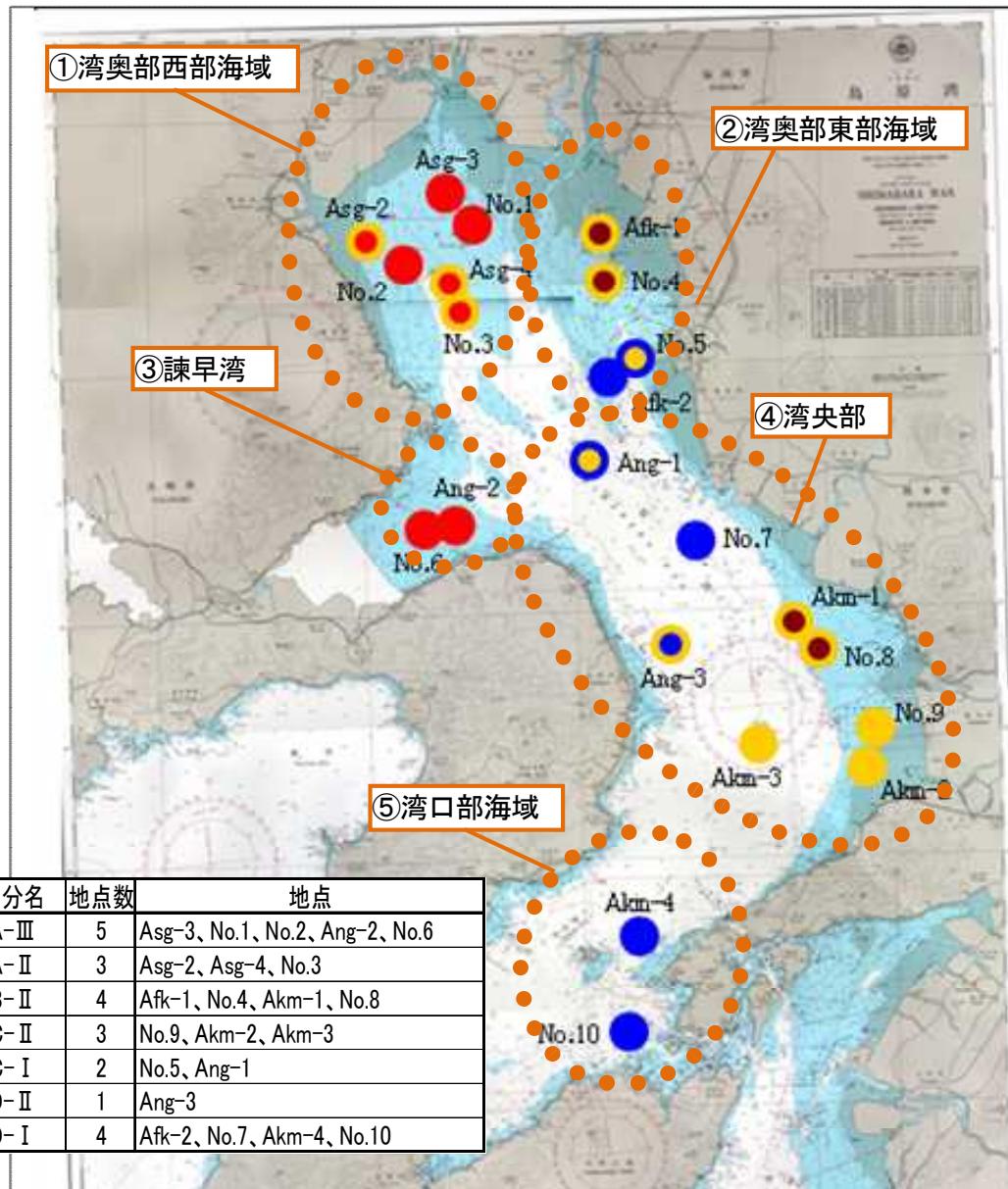
(のべ数:件)

収集した報告書等の分類			国				県				その他 大学等
			農林水産省	水産庁	国土交通省	環境省	福岡県	佐賀県	長崎県	熊本県	
1 委員会報告（平成18年8月～8月0頁に亘る報告書等）	3. 具体的な再生方策	(1)底質環境の改善	9	3	3	2	3	14	1	14	1
		(2)沿岸域の環境保全、回復	1	2	3		6	5	2	14	5
		(3)貧酸素水塊等への対策	11	3		4	2	11	5	8	2
		(4)貝類、魚類等の資源管理及び増養殖	10	1			6	28	17	53	4
		(5)持続的なノリ養殖のための施策の推進		4	1		11	43	5	9	1
		(6)八代海における持続的な養殖のための施策の推進		2						6	5
	4. 解明すべき課題 (重点化を図るべき研究課題)	(1)二枚貝		1		1	1	16	3		
		(2)魚類等の資源生態	10			2	1	6		5	
		(3)潮流・潮汐	5								
		(4)土砂等に関する知見の蓄積			2						
		(5)汚漏メカニズムの解明とモデルの構築					1	5	2		1
小 計			46	16	9	10	35	125	33	110	18
2	第28～30回評価委員会における報告事項に関する報告書等		7	4	7	6	1	1	1	2	2
3	その他委員から推薦のあった報告書等		5		2	6				2	5
4	九州北部豪雨の影響に関する資料等			2	3	2	1	1		2	
合 計			58	22	21	24	37	127	34	116	20
							464				

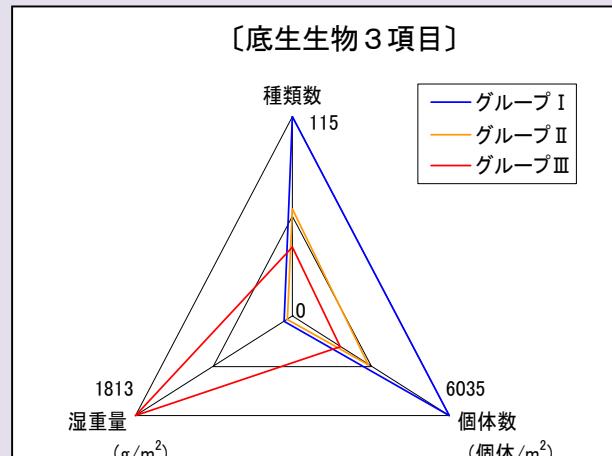
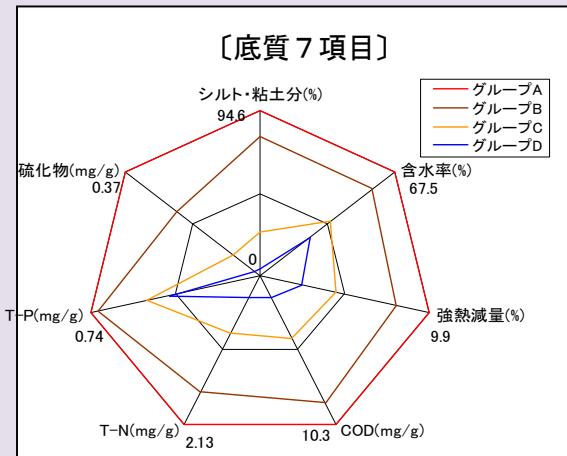
※「1 委員会報告(平成18年12月)に関する報告書等」については、複数の分類に該当し重複してカウントされるものが含まれる。

※本文中の計453件は合計の464件から「4 九州北部豪雨の影響に関する資料」を除いたものである。

環境省及び国土交通省の調査結果等を基にした有明海の海域区分案



海域の区分に用いた底質、底生生物のクラスター解析での分類



有明海の底質・底生生物のクラスター解析分類地点別の環境特性整理表（1）

底質区分	底生生物区分	細区分	地点名	水深(m)	底質(2003~2010)	底生生物(2003~2010)			水質・負荷(1987~2004)	流況等(2002)	
						種類数・個体数 ・湿重量	個体数 優占種①	個体数 優占種②	個体数 優占種③		
A	II	A-II (●○)	Asg-2	2	泥質で、有機物、栄養塩の堆積量が最も多い底質環境	種類数、個体数が少なく、湿重量も少ない	Corophium sp.	ヒラタヌマコダキガイ	カワゲツボ*	COD、PO ₄ が最も高く、夏季DOが最も低い	残差流が弱く、海水が停滞しやすい環境である。 底質区分は泥分や有機物が蓄積しやすい区分であることから、底層の流れも遅い場所と考えられる。
			Asg-4	6			ホソツツムシ	ホトトリア科	タルマコガイ	水温、塩分、夏季DO、COD、DIN、透明度、PO ₄ は中間的な値である	
			No.3	10			タルマコガイ	ホソナキサクーマ	クビナガスカメ	塩田川沖海底水道の近傍であり、残差流もAsg-2、4と比較すると大きい 底質区分は泥分や有機物が蓄積しやすい区分であることから、底層の流れはAsg-2、4と同様に遅い場所と考えられる。	
	III	A-III (●○)	Asg-3	1		種類数、個体数が最も少なく、湿重量が最も多い	サルホウカイ	シスクガイ	トウガタカイ科	COD、PO ₄ が最も高く、夏季DOが最も低い	残差流が弱く、海水が停滞しやすい環境であり、泥分や有機物が蓄積しやすい
			No.1	5			Heteromastus sp.	イトカイ科	トゲイカリナマコ		
			No.2	6			ヒメカノコアサリ	シスクガイ	バラブリオノスピオ属(B型)	底質区分がAsg-3、No.1、No.2と同様のAグループに属していることから、残差流が弱く、海水が滞留しやすいと考えられる。また、大河川は流入していないが、調整池内からの流入があることから、有機物量や栄養塩類は高いと考えられる	底質の泥分、有機物量が多いことから、底層の流れは遅い場所であると考えられる
			Ang-2	8			Corophium sp.	シスクガイ	ヒメカノコアサリ		
			No.6	8			クビナガスカメ	シスクガイ	イトエラスピオ		
B	II	B-II (●○)	Afk-1	3	泥質で、有機物、栄養塩の堆積量が多く、泥分はグループAよりも少ない	種類数、個体数が少なく、湿重量も少ない	Sigambra tentaculata	Glycinde sp.	Heteromastus sp.	水温、塩分、夏季DO、COD、DIN、透明度、PO ₄ は中間程度	筑後川沖東海底水道付近の地点であり、湾奥西部よりも残差流が南向きに大きいため、湾奥西部よりも泥分が少ない可能性が考えられる
			No.4	7			ルンブリネリス ロンキフォリア	ケンサキスピオ	カタマカリギホシイソメ		
			Akm-1	11			シスクガイ	ヒサンコエビ科	ウメハナガイ	DIN、PO ₄ が低く、その他の項目は中間程度	恒流の分布をみると、Akm-1、No.8付近では流れが不規則で弱く、近傍のNo.9、Akm-2と比較すると、泥分等が堆積しやすい環境であると考えられる
			No.8	10			シスクガイ	Prionospio sp.	エウコネ属		
C	I	C-I (●○)	No.5	10	砂泥質で、栄養塩、有機物の堆積が少ない底質環境	種類数、個体数が最も多い	Photis sp.	スナクモヒテ科	Corophium sp.	水温、塩分、夏季DO、COD、DIN、透明度、PO ₄ は中間程度	筑後川沖東海底水道付近の地点であり、湾奥西部よりも残差流が南向きに大きいため、湾奥西部よりも泥分が少ない可能性が考えられる
			Ang-1	23			Prionospio sp.	バラオニス科	Corophium sp.		
	II	C-II (●○)	No.9	4	種類数、個体数が少なく、湿重量も少ない	種類数、個体数が少なく、湿重量も少ない	フクロスカメ	チヨハナガイ	クダオソコエビ	DIN、PO ₄ が低く、その他の項目は中間程度	恒流の分布をみると、近傍のAkm-1、No.8付近よりも南向きに大きいことから、Akm-1、No.8よりも泥分等が堆積しにくい環境であると考えられる
			Akm-2	4			カイムシ目	モロテコガイ	Mediomastus sp.		
			Akm-3	42			バラオニス科	Photis sp.	Sigambra tentaculata		残差流が南向きに比較的大きく、底質の泥分、有機物量が少ないとあることから、底層の流れが速く、泥分、有機物が堆積しにくい環境であると考えられる
D	I	D-I (●○)	Afk-2	8	砂質で、栄養塩、有機物の堆積が最も少ない底質環境	種類数、個体数が最も多い	Corophium sp.	ホソツツムシ	タナイス目	水温、塩分、夏季DO、COD、DIN、透明度、PO ₄ は中間程度	残差流が南向きに比較的大きく、底質の泥分、有機物量が少ないとあることから、底層の流れが速く、泥分、有機物が堆積しにくい環境であると考えられる
			No.7	17			スナクモヒテ科	Corophium sp.	クダオソコエビ		
			Akm-4	50			Gammaropsis sp.	ホソコエビ	クモヒテ綱	冬季水温、塩分、夏季DO、透明度が高く、夏季水温、COD、DIN、PO ₄ が低い	詳細は不明
			No.10	14			Gammaropsis sp.	Corophium sp.	Photis sp.		詳細は不明
	II	D-II (●○)	Ang-3	30	種類数、個体数が少なく、湿重量も少ない	Gammaropsis sp.	バラオニス科	カザリコガイ科	冬季水温、塩分、夏季DO、透明度が高く、夏季水温、COD、DIN、PO ₄ が低い	残差流が大きく、底質の泥分、有機物量が少ないとあることから、底層の流れが速く、泥分、有機物が堆積しにくい環境であると考えられる	

※ 項目の括弧内は整理した調査データの年代を示す

※ 個体数優占種の網掛けは、■：軟体動物門、■：環形動物門、■：節足動物門、■：その他を示す。

※ 水深の基準面は略最低潮面

※ 黒字は既存調査による結果、既存資料による報告を、赤字は詳細不明、及び可能性を示した。

有明海の底質・底生生物のクラスター解析分類地点別の環境特性整理表（2）

底質区分	底生生物区分	細区分	地点名	水深(m)	懸濁物の挙動	水塊構造(2004~2011)		赤潮		貧酸素水塊(2004~2011)		
						水温・塩分	濁度	確認状況(1986~2005)	構成種(2004~2009)			
A	II	A-II (●)	Asg-2	2	堆積傾向にある区域内の地点	近傍に塩田川が流入しており、貧酸素水塊の発生頻度も高いことから成層構造が形成されていると考えられる	干潟前面で水深が浅く、上げ潮時に底層で高濁度の水塊が発生している可能性が高い	発生延日数が増加しており、長期化する傾向	珪藻のSkeletonema costatumの確認日数が多い	貧酸素水塊の発生頻度が高く、南北方向に移動空間的な挙動については不明		
			Asg-4	6	侵食傾向にある区域内の地点	夏季に水温・塩分成層が形成される	上げ潮時に底層で高濁度の水塊が発生			発生頻度は有明海湾奥部西側海域や諫早湾内よりも低いが、年によっては発生する空間的な挙動については不明		
			No.3	10	侵食傾向にある区域内の地点							
	III	A-III (●)	Asg-3	1	堆積傾向にある区域内の地点	近傍に塩田川が流入しており、貧酸素水塊の発生頻度も高いことから成層構造が形成されていると考えられる	干潟前面で水深が浅く、泥分が高いことから上げ潮時に底層で高濁度の水塊が発生している可能性が高い	発生延日数が増加しており、長期化する傾向	珪藻のSkeletonema costatumの確認日数が多い	貧酸素水塊の発生頻度が高く、南北方向に移動空間的な挙動については不明		
			No.1	5	堆積傾向にある区域内の地点							
			No.2	6	堆積傾向にある区域内の地点							
			Ang-2	8	侵食傾向にある区域内の地点	河川流量の増加時期に、湾奥部から諫早湾奥部にかけて水温躍層、塩分躍層の形成が報告されている ⁷⁾ 。	干潟前面で水深が浅く、泥分が高いことから上げ潮時に底層で高濁度の水塊が発生している可能性が高い	発生回数、発生延日数が増加しており、頻発化、長期化する傾向	渦鞭毛藻のCochlodinium polykrikoides、ラフィド藻のChattonella antiquaの確認日数が多い	貧酸素水塊の発生頻度が高く、東西方向に往復空間的な挙動については不明		
			No.6	8	侵食傾向にある区域内の地点							
B	II	B-II (●)	Afk-1	3	侵食傾向にある区域内の地点	夏季に水温・塩分成層が形成される	水深が浅く、泥分も比較的高いことから上げ潮時に底層で高濁度の水塊が発生している可能性が高い	発生延日数が増加しており、長期化する傾向	珪藻のSkeletonema costatumの確認日数が多い	発生頻度は有明海湾奥部西側海域や諫早湾内よりも低いが、年によっては発生する空間的な挙動については不明		
			No.4	7	侵食傾向にある区域内の地点							
			Akm-1	11	詳細は不明		発生回数、発生延日数が増加しており、頻発化、長期化する傾向	珪藻のSkeletonema costatum、渦鞭毛藻のCochlodinium polykrikoides、ラフィド藻のChattonella antiquaとともに確認日数が多い	調査地点の近傍で貧酸素水塊が発生している本調査地点で発生しているかどうかは不明			
			No.8	10	詳細は不明							
C	I	C-I (○)	No.5	10	堆積傾向にある区域内の地点	近傍のAfk-2において水温・塩分成層が確認されていること、残差流が筑後川や矢部川からNo.5に向かっていることから、水温・塩分成層が形成されると考えられる	詳細は不明	発生延日数が増加しており、長期化する傾向	珪藻のSkeletonema costatumの確認日数が多い	調査地点の近傍で貧酸素水塊が発生している本調査地点で発生しているかどうかは不明		
			Ang-1	23	詳細は不明	夏季に水温・塩分成層が形成される	高濁度水塊は発生しない	発生回数、発生延日数が増加しており、頻発化、長期化する傾向	渦鞭毛藻のCochlodinium polykrikoides、ラフィド藻のChattonella antiquaの確認日数が多い	赤潮が発生し、水温・塩分成層が形成され、底質の有機物量が少ない区分であることから、貧酸素水塊は発生していない可能性が考えられる		
	II	C-II (●)	No.9	4	詳細は不明	白川、緑川からの河川流入があり、沖合のAkm-3でも成層構造が確認されていることから、水温・塩分成層は形成されると考えられる	詳細は不明	発生回数、発生延日数が増加しており、頻発化、長期化する傾向	珪藻のSkeletonema costatum、渦鞭毛藻のCochlodinium polykrikoides、ラフィド藻のChattonella antiquaとともに確認日数が多い	調査地点の近傍で貧酸素水塊が発生している本調査地点で発生しているかどうかは不明		
			Akm-2	4	詳細は不明		詳細は不明					
			Akm-3	42	詳細は不明	夏季に水温・塩分成層が形成される	高濁度水塊は発生しない			既存の調査結果(「海輝」水塊構造調査)では貧酸素水塊は確認されていない		
D	I	D-I (●)	Afk-2	8	堆積傾向にある区域内の地点	夏季に水温・塩分成層が形成される	泥分が少ないため、海底泥の巻き上がりによる高濁度水塊は発生しない可能性が高いと考えられる	発生延日数が増加しており、長期化する傾向	珪藻のSkeletonema costatumの確認日数が多い	調査地点の近傍で貧酸素水塊が発生している本調査地点で発生しているかどうかは不明		
			No.7	17	詳細は不明		発生回数、発生延日数が増加しており、頻発化、長期化する傾向	珪藻のSkeletonema costatum、渦鞭毛藻のCochlodinium polykrikoides、ラフィド藻のChattonella antiquaとともに確認日数が多い	底質が砂質であり、有機物量の堆積が少ないとから貧酸素水塊は発生していない可能性が考えられる			
			Akm-4	50	詳細は不明				高濁度水塊は発生しない	既存の調査結果(「海輝」水塊構造調査)では貧酸素水塊は確認されていない		
			No.10	14	詳細は不明	詳細は不明			泥分が少ないため、海底泥の巻き上がりによる高濁度水塊は発生しない可能性が高いと考えられる	底質が砂質であり、有機物量の堆積が少ないとから貧酸素水塊は発生していない可能性が考えられる		
	II	D-II (○)	Ang-3	30	詳細は不明	詳細は不明	泥分が少ないため、海底泥の巻き上がりによる高濁度水塊は発生しない可能性が高いと考えられる	発生回数、発生延日数が増加しており、頻発化、長期化する傾向	渦鞭毛藻のCochlodinium polykrikoides、ラフィド藻のChattonella antiquaの確認日数が多い	底質が砂質であり、有機物量の堆積が少ないとから貧酸素水塊は発生していない可能性が考えられる		

赤潮の出典：「九州海域の赤潮」水産庁九州漁業調整事務所、各県(福岡：福岡県水産海洋技術センター有明海研究所、佐賀：有明水産振興センター、長崎：長崎県水産試験場、

熊本：熊本県水産研究センター、鹿児島：鹿児島県水産技術開発センター)からの提供資料及びホームページ資料

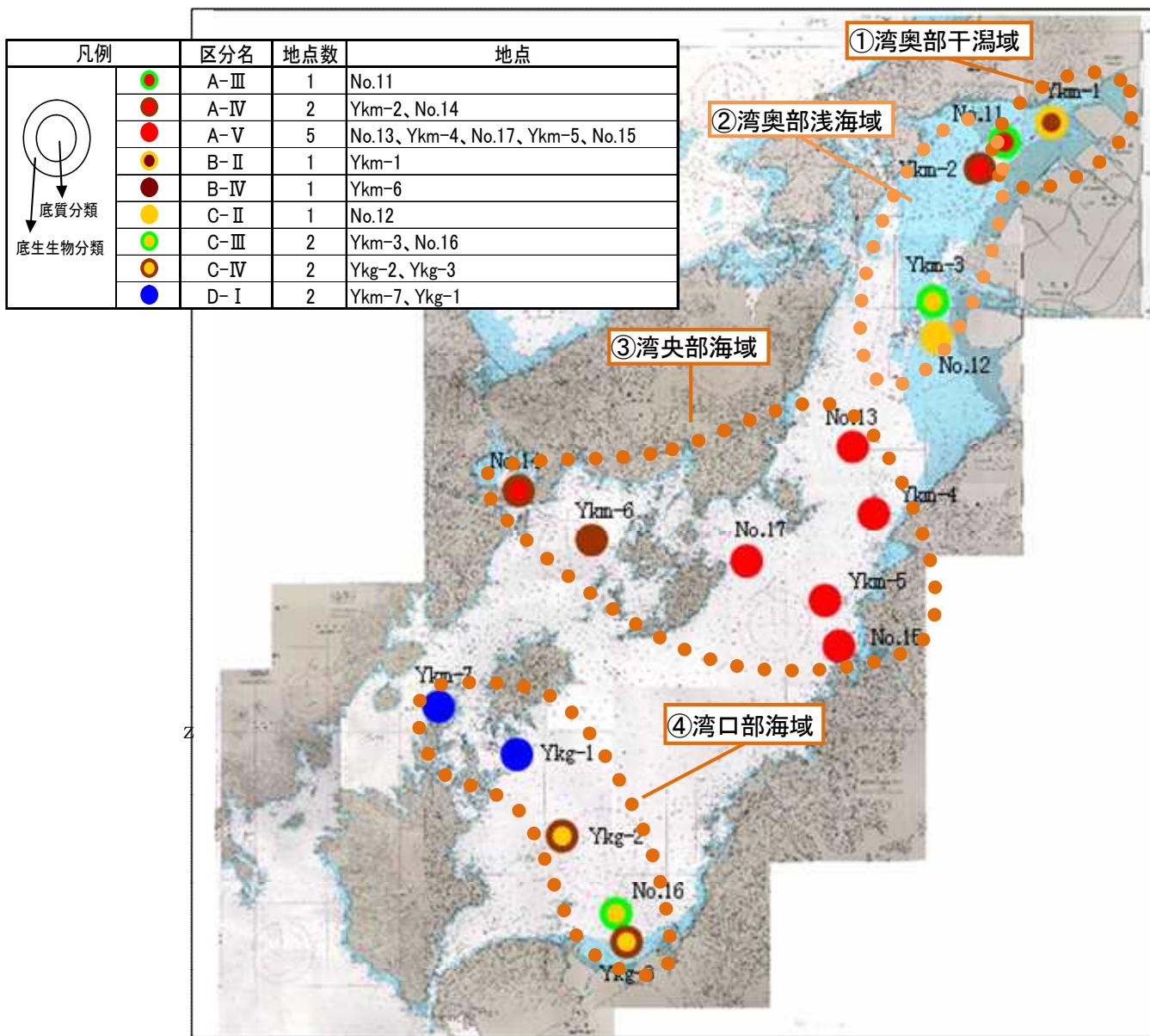
※ 項目の括弧内は整理した調査データの年代を示す

※ 個体数優占種の網掛けは、■：軟体動物門、■：環形動物門、■：節足動物門、■：その他を示す。

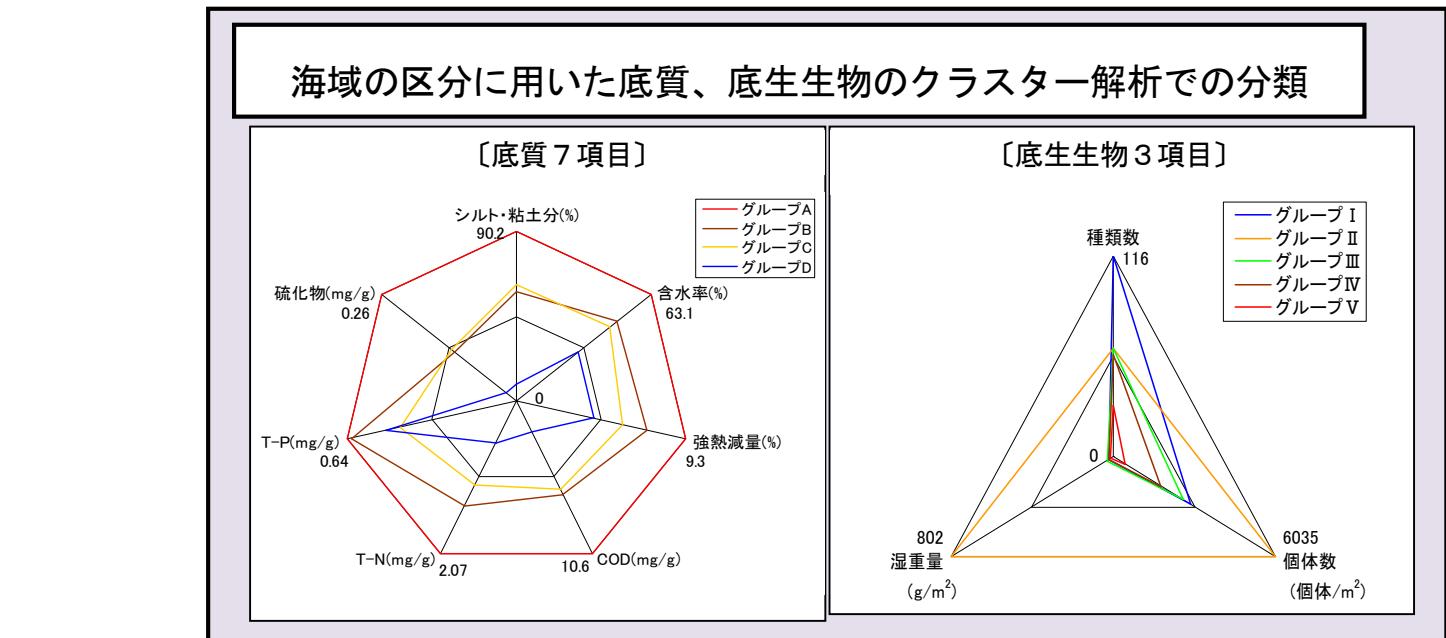
※ 水深の基準面は略最低潮面

※ 黒字は既存調査による結果、既存資料による報告を、赤字は詳細不明、及び可能性を示した。

環境省及び国土交通省の調査結果等を基にした八代海の海域区分



海域の区分に用いた底質、底生生物のクラスター解析での分類



八代海の底質・底生生物のクラスター解析分類地点別の環境特性整理表（1）

底質区分	底生物区分	細区分	地点名	水深(m)	底質(2003~2010)	底生生物(2003~2010)				水質・負荷(—)	流況・海底地形等(2001~2002)
						種類数・個体数 ・湿重量	個体数 優占種①	個体数 優占種②	個体数 優占種③		
A	III	A-III (●)	No.11	8	泥質で、有機物、栄養塩の堆積量が最も多い底質環境	種類数はグループII、IVと同程度であり、個体数が比較的多い特徴を有する生息状況	ホトキスガイ	シスクガイ	タルマコガイ	平均流が弱く、水質が滞留する可能性があること、湾奥部の大野川、大鞘川等のCOD、T-P、T-Nが高いことから有機物、栄養塩類濃度が高い可能性がある	平均流が湾央から湾奥部に向かっているため、泥分、有機物等が堆積しやすい環境であると考えられる
			Ykm-2	9		種類数はグループII、IIIと同程度であり、個体数、湿重量が比較的少ない特徴を有する生息状況	シスクガイ	リソツボ科	Corophium sp.	平均流が弱く、水質が滞留する可能性があること、湾奥部の大野川、大鞘川等のCOD、T-P、T-Nが高いことから有機物、栄養塩類濃度が高い可能性がある	平均流が湾央から湾奥部に向かっているため、泥分、有機物等が堆積しやすい環境にあると考えられる。
	IV	A-IV (●)	No.14	24		ルンブリネリスロンキフォリア	Mediomastus sp.	シスクガイ	近傍に養殖場が存在していることから、その影響により水質・底質が悪化している可能性がある	閉鎖性が高く、平均流が遅いことから泥分、有機物等が堆積しやすい環境にあるとともに、養殖の影響による底質悪化も考えられる	
			No.13	25		Sthenolepis sp.	イトカイ科	シスクガイ		平均流は、上層、下層とも八代海の中では遅いわけではなく、No.13は湾奥部や湾央西部よりも泥分、有機物等は堆積しにくいと考えられることから、泥分・有機物が多い原因は他の要因によると考えられる	
	V	A-V (●)	Ykm-4	21		シスクガイ	Sthenolepis sp.	Sigambra tentaculata			
			No.17	25		ノラリウコムシ科	ハナオカカキゴカイ	—			
			Ykm-5	38		シスクガイ	ヒサシコエビ科	Sthenolepis sp.	近傍に養殖場が存在していることから、その影響により水質・底質が悪化している可能性がある	比較的岸側の地点が多く、平均流は比較的遅いことから泥分、有機物等が堆積しやすい環境にあると考えられる	
			No.15	10		モロテコカイ	シスクガイ	—			
B	II	B-II (●)	Ykm-1	3	砂泥質で、有機物、栄養塩の堆積量が多く、T-PがグループCよりも多い底質環境	種類数はグループIII、IVと同程度であり、個体数、湿重量が最も多い特徴を有する生息状況	ホトキスガイ	トウガタガイ科	Corophium sp.	平均流が弱く、水質が滞留する可能性があること、湾奥部の大野川、大鞘川等のCOD、T-P、T-Nが高いことから有機物、栄養塩類濃度が高い可能性がある	平均流が湾央から湾奥部に向かっているため、細粒分が堆積しやすい環境にあると考えられる。No.11やYkm-2よりも砂分が多いのは、氷川の河口部に近いことが可能性として考えられる。
	IV	B-IV (●)	Ykm-6	34		種類数はグループII、IIIと同程度であり、個体数、湿重量が比較的少ない特徴を有する生息状況	Lumbrineris sp.	イトカイ科	Sigambra tentaculata	平均流が比較的弱く、近傍に養殖場が多いことから、水質・底質の有機物、栄養塩類が高い可能性がある。 底質のT-Pが高いことは養殖の影響による可能性がある	平均流は比較的遅いことから泥分、有機物が堆積しやすい可能性がある。
C	II	C-II (●)	No.12	7	砂泥質で、有機物、栄養塩の堆積量が多く、T-PがグループBよりも少ない底質環境	種類数はグループIII、IVと同程度であり、個体数、湿重量が最も多い特徴を有する生息状況	シスクガイ	モロテコカイ	タルマコガイ	球磨川からの流入負荷の影響を最も受けやすい	平均流は比較的遅いため、泥分、有機物が堆積しやすい可能性がある 球磨川河口部に位置しているため、砂分の供給量が多いことが湾奥部との違いと考えられる
	III	C-III (●)	Ykm-3	7		種類数はグループII、IVと同程度であり、個体数が比較的多い特徴を有する生息状況	シスクガイ	モロテコカイ	タルマコガイ	球磨川からの流入負荷の影響を最も受けやすい	平均流は比較的遅いため、泥分、有機物が堆積しやすい可能性がある 球磨川河口部に位置しているため、砂分の供給量が多いことが湾奥部との違いと考えられる
			No.16	13		カエトゾネ属	シスクガイ	カタマカリキボシイソメ			下層の平均流は比較的遅いため、泥分、有機物が堆積しやすいと考えられる。
	IV	C-IV (●)	Ykg-2	32		Terebellides sp.	イクスホシムシ属	Lumbrineris sp.			下層の平均流は比較的遅いため、泥分、有機物が堆積しやすいと考えられる。
			Ykg-3	13		シスクガイ	Sigambra tentaculata	Chaetozone sp.			
D	I	D-I (●)	Ykm-7	56	砂質で、栄養塩、有機物の堆積が最も少ない底質環境	種類数が最も多く、個体数も比較的多い	Caprella sp.	Pseudopolydora sp.	Urothoe sp.	平均流が速く、底質の泥分、有機物量が少ないとから、水質も良好である可能性が考えられる	平均流によると、流速が早く、泥分、有機物等が堆積しにくい環境であると考えられる
			Ykg-1	36		ヒツメスガイ	Paraprionopspio sp.(CI型)	線虫綱			

※ 項目の括弧内は整理した調査データの年代を示す。

※ 個体数優占種の網掛けは、■：軟体動物門、■：環形動物門、■：節足動物門、■：その他を示す。

※ 水深の基準面は略最低潮面

※ 黒字は既存調査による結果、既存資料による報告を、赤字は詳細不明、及び可能性を示した。

八代海の底質・底生生物のクラスター解析分類地点別の環境特性整理表（2）

底質区分	底生物区分	細区分	地点名	水深(m)	水塊構造(2004~2011)		赤潮確認状況及び構成種(2004~2009)	貧酸素水塊(2004~2011)
					水温・塩分	濁度		
A	III	A-III (●)	No.11	8	夏季に水温・塩分成層が形成される	上げ潮時に高濁度の水塊が発生	Skeletonema costatum、Cochlodinium polykrikoides、Chattonella antiquaとともに確認されるが、Skeletonema costatumが多い	調査地点の近傍で貧酸素水塊が発生している
	IV	A-IV (●)	Ykm-2	9	夏季に水温・塩分成層が形成される	上げ潮時に高濁度の水塊が発生	Skeletonema costatum、Cochlodinium polykrikoides、Chattonella antiquaとともに確認されるが、Skeletonema costatumが多い	既存の調査結果（「海輝」水塊構造調査）では貧酸素水塊は確認されていない
			No.14	24	詳細は不明	詳細は不明	Skeletonema costatum、Cochlodinium polykrikoides、Chattonella antiquaとともに確認されるが、Cochlodinium polykrikoides、Chattonella antiquaが多い	底質は泥分、有機物量が多い区分であり、閉鎖性の強いことから底層のDOが低くなる可能性が考えられる
	V	A-V (●)	No.13	25	夏季に水温・塩分成層が形成される	高濁度水塊は発生しない	Skeletonema costatum、Cochlodinium polykrikoides、Chattonella antiquaとともに確認されるが、Skeletonema costatumが多い	既存の調査結果（「海輝」水塊構造調査）では貧酸素水塊は確認されていない
			Ykm-4	21	海輝による水塊構造調査結果では近傍地点において夏季に水温・塩分成層が確認されていることから、同様の成層構造が形成されている可能性が考えられる	詳細は不明	Skeletonema costatum、Cochlodinium polykrikoides、Chattonella antiquaとともに確認されるが、Cochlodinium polykrikoides、Chattonella antiquaが多い	底質は泥分、有機物量が多い区分であり、閉鎖性の強いことから底層のDOが低くなる可能性が考えられる
			No.17	25		詳細は不明		
			Ykm-5	38		詳細は不明		
			No.15	10		水深が浅く、泥分も比較的高いことから底層で高濁度の水塊が発生している可能性が考えられる		
B	II	B-II (●)	Ykm-1	3	海輝による水塊構造調査結果では近傍地点において夏季に水温・塩分成層が確認されていることから、同様の成層構造が形成されている可能性が考えられる	水深が浅く、泥分も比較的高いことから底層で高濁度の水塊が発生している可能性が考えられる	Skeletonema costatum、Cochlodinium polykrikoides、Chattonella antiquaとともに確認されるが、Skeletonema costatumが多い	調査地点の近傍で貧酸素水塊が発生している
B	IV	B-IV (●)	Ykm-6	34	詳細は不明	詳細は不明	Skeletonema costatum、Cochlodinium polykrikoides、Chattonella antiquaとともに確認されるが、Cochlodinium polykrikoides、Chattonella antiquaが多い	詳細は不明
C	II	C-II (●)	No.12	7	海輝による水塊構造調査結果では近傍地点において夏季に水温・塩分成層が確認されていること、球磨川からの流入があることから、同様の成層構造が形成されている可能性が考えられる	水深が浅く、泥分も比較的高いことから底層で高濁度の水塊が発生している可能性が考えられる	Skeletonema costatum、Cochlodinium polykrikoides、Chattonella antiquaとともに確認されるが、Skeletonema costatumが多い	球磨川河口部沖で貧酸素水塊の発生が確認されている
C	III	C-III (●)	Ykm-3	7	海輝による水塊構造調査結果では近傍地点において夏季に水温・塩分成層が確認されていること、球磨川からの流入があることから、同様の成層構造が形成されている可能性が考えられる	水深が浅く、泥分も比較的高いことから底層で高濁度の水塊が発生している可能性が考えられる	Skeletonema costatum、Cochlodinium polykrikoides、Chattonella antiquaとともに確認されるが、Skeletonema costatumが多い	球磨川河口部沖で貧酸素水塊の発生が確認されている
C			No.16	13		詳細は不明	Cochlodinium polykrikoides、Chattonella antiquaの確認日数が多い 平成17年以降は珪藻のSkeletonema costatumはほとんど確認されていない	詳細は不明
C	IV	C-IV (●)	Ykg-2	32	夏季に水温・塩分成層が形成される	高濁度水塊は発生しない	Cochlodinium polykrikoides、Chattonella antiquaの確認日数が多い 平成17年以降は珪藻のSkeletonema costatumはほとんど確認されていない	既存の調査結果（「海輝」水塊構造調査）では貧酸素水塊は確認されていない
D	I	D-I (●)	Ykm-7	56	詳細は不明	泥分が少ないため、海底泥の巻き上がりによる高濁度水塊は発生しない可能性が高いと考えられる	Cochlodinium polykrikoides、Chattonella antiquaの確認日数が多い 平成17年以降は珪藻のSkeletonema costatumはほとんど確認されていない	底質の有機物量が少ないとから酸素消費量が小さく、貧酸素水塊は発生していない可能性が考えられる
D			Ykg-1	36	詳細は不明	泥分が少ないため、海底泥の巻き上がりによる高濁度水塊は発生しない可能性が高いと考えられる	Cochlodinium polykrikoides、Chattonella antiquaの確認日数が多い 平成17年以降は珪藻のSkeletonema costatumはほとんど確認されていない	底質の有機物量が少ないとから酸素消費量が小さく、貧酸素水塊は発生していない可能性が考えられる

赤潮の出典：「九州海域の赤潮」水産庁九州漁業調整事務所、各県(福岡：福岡県水産海洋技術センター有明海研究所、佐賀：有明水産振興センター、長崎：長崎県水産試験場、熊本：熊本県水産研究センター、鹿児島：鹿児島県水産技術開発センター)からの提供資料及びホームページ資料

※ 項目の括弧内は整理した調査データの年代を示す。

※ 個体数優占種の網掛けは、■：軟体動物門、□：環形動物門、■：節足動物門、■：その他を示す。

※ 水深の基準面は略最低潮面

※ 黒字は既存調査による結果、既存資料による報告を、赤字は詳細不明、及び可能性を示した

生物・水産資源・水環境問題検討作業小委員会の議事概要

1. 第1回

日時；平成24年9月10日（月）14:00-16:00

場所；経済産業省別館1020号会議室

議題；小委員会の設置について

　　小委員会の作業方針について

　　情報収集方針について

　　その他

概要

(1) 小委員会設置の趣旨、役割の説明を事務局より受けるとともに、小委員会の3つの作業方針、当面の作業の内容及び流れ、海域再生対策検討作業小委員会（以下「海域再生小委」という。）との作業分担について確認した。

(2) 小委員会における調査検討に必要となる情報の収集内容、収集先、方法等についての一覧表「情報収集方針」をとりまとめるとともに、同方針に基づいて、事務局が特措法の主務省や関係県から情報の収集を行うこととなった。

2. 第2回

日時；平成24年12月21日（金）10:00～12:00

場所；熊本市国際交流会館6・7階ホール

議題；有用二枚貝類の現況、問題点、問題点の原因・要因について

　　九州北部豪雨による影響について

　　その他

概要

(1) 松山委員から、「有明海の有用二枚貝類の整理と検討」と題して、有明海のタイラギ、サルボウ、アサリについての漁獲等の状況、現場調査や室内実験等から得られた新しい知見等について紹介があり、これに基づき、委員間で有明海のタイラギ、サルボウ、アサリについての問題点、問題点の原因要因について検討した。

　　検討した結果を基に、事務局が事前に準備した「有明海有用二枚貝類に係る整理分析方針（案）」に修正を加えた上で、次回小委員会で再度検討することとした。

　　また、議論の中で、有明海二枚貝類減少要因として、陸域からの土砂供給及び栄養塩の供給について意見が出されたため、海域再生小委に情報を求ることとなった。

(2) 事務局より、九州北部豪雨に関連して、特措法の主務省及び関係県より提供のあった情報を基に、福岡県、熊本県などの干潟・浅海域では局所的には泥の堆積が確認されていることなどの説明がなされた。

3. 第3回

日時；平成25年3月1日（金）10:00～12:00

場所；イイノホール&カンファレンスセンターRoomB1+2

議題；有用二枚貝類の現況、問題点、問題点の原因・要因について

　　海域再生対策検討作業小委員からの経過報告について

　　その他

概要

(1) 最初に事務局より、海域再生小委に情報提供を求めた陸域からの土砂及び栄養塩の供給に関して、海域再生小委における経過報告の説明があった。

　　続いて、古賀委員から、「有明海産タイラギの生態特性と漁場形成要因について」と題して、過去からの漁業操業、漁獲の経緯、2008発生群について、浮泥の影響などの現地調査、室内実験等の知見の紹介があった。

　　第2回小委員会以降修正を加えた「有明海有用二枚貝類に係る整理分析方針（案）」を基に検討を行った。

　　第2回及び第3回小委員会までの検討状況を取りまとめて第31回委員会に報告することとなった。

海域再生対策検討作業小委員会の議事概要

1. 第1回

日時；平成24年9月11日（火）10:00-12:00

場所；経済産業省別館1020号会議室

議題；小委員会の設置について

　　小委員会の作業方針について

　　情報収集方針について

　　その他

概要

- (1) 小委員会設置の趣旨、役割の説明を事務局より受けるとともに、小委員会の3つの作業方針、当面の作業の内容及び流れ、生物・水産資源・水環境問題検討作業小委員会（以下「生物問題小委」という。）との作業分担について確認した。
- (2) 小委員会における調査検討に必要となる情報の収集内容、収集先、方法等についての一覧表「情報収集方針」をとりまとめるとともに、同方針に基づいて、事務局が特措法の主務省や関係県から情報の収集を行うこととなった。

2. 第2回

日時；平成24年12月21日（金）13:30～15:30

場所；熊本市国際交流会館6・7階ホール

議題；海洋構造、水質環境（海域）、底質環境（海域）、生物生態系の現況について

　　九州北部豪雨による影響について

　　その他

主な内容

- (1) 環境省より、平成24年度に有明海で実施している調査の中から、
①「底質の泥化と懸濁物の関係について」と題して、有明海湾奥部沖合
域における底質の泥化は、有明海湾奥部岸寄りに堆積した泥が南風台
風や出水により一時的に拡散することで引き起こされたもので、長期
的な傾向でないと推察されることなどが、
②「魚類の生態系について」と題して、有明海の魚類の生態系の特徴の
一つとしてサメ・エイの種類が豊富で13種類が各員されたこと、その
中には、年間を通じて有明海で生息する種、夏季に繁殖のために来遊
し、秋～冬に幼魚とともに有明海の外へ移動する種などが存在するこ
となどが、
③「底質分布と底生生物の関係について」と題して、環境省及び国土交
通省の調査結果から、有明海を、底質性状から4タイプに、底生生物
の生息状況から3タイプに分けられ、これを組み合わせると7つの区
分に整理出来ることなどが、
紹介された。

- (2) 事務局より、九州北部豪雨に関連して、特措法の主務省及び関係県より
提供のあった情報を基に、福岡県、熊本県などの干潟・浅海域では局所
的には泥の堆積が確認されていることなどの説明がなされた。

3. 第3回

日時；平成25年3月1日（金）10:00～12:00

場所；イイノホール&カンファレンスセンターRoomB1+2

議題；海洋構造、水質環境（海域）、底質環境（海域）、生物生態系の現況について

生物・水産資源・水環境問題検討作業小委員会への経過報告について

概要

- (1) 国土交通省から「有明・八代海海域環境検討委員会における検討について」と題して、海洋環境整備船によるこれまでの調査結果等に基づいて、有明海及び八代海の各海域の環境特性の把握を行い、生態系の多様性を高める事から取り組むべく、環境再生方策を検討するためのケーススタディー海域の船底を進めていることが紹介された。
- (2) 熊本県から、「有明海・八代海干潟等沿岸海域再生検討委員会報告書（H18.3）概要」と題して、熊本県が策定した有明海・八代海の再生のためのマスターplanに当たって、最初に既存資料の収集。整理を行い、不足する部分について沿岸漁業者・地域住民を対象を対象に聞き取り・アンケート調査を実施し基礎資料としたことや、地形や底質、漁業等6つの環境特性で県内を6つの地域に区分けし、地域ごとに課題及び課題への対応策を抽出、それをベースに各地域において主要な課題に対応した再生方策をとりまとめるゾーニング型のプラン策定のメリットについて確認したことが紹介された。
- (3) 生物問題小委から、有明海の二枚貝類の減少要因の検討に当たって、陸域からの土砂及び栄養塩の供給の状況について情報提供を求められた件について、海域再生小委として、「今後、国及び関係県から収集した報告書等を基に、有明海の環境特性にかかるとりまとめを進める中で、生物問題小委から情報提供依頼のあった事項についても検討し、結論が得られた段階で改めて、正式に回答させていただきたい。」と回答することを確認した。
- (3) 今後の検討の進め方について確認を行った。（確認した内容、小委員会におけるこれまでの取組等の概況についての〇頁に記載。）

(参考3)

環境省が実施した底質・底生生物データ等に基づく 海域区分図作成の試行について（有明海の例）

有明・八代海の環境変化について、「有明海・八代海総合調査評価委員会」において海域における物質収支のバランスが崩れた直接的な要因の1つとして、

底質の悪化や干渉消失等によって底生生物の生息環境が悪化し、底生生物が減少している。
底生生物が減少したため、物質循環における有機物分解過程の機能が低下し、海水中の有機物の增加(赤潮抑制機能の低下)や底質中の有機物の蓄積(底層水の酸素消費促進による貧酸素化)が起きている。

などが指摘されていることを踏まえ、「底生生物の生息環境」の観点から環境特性を整理することとした。

その取組として環境省取得データに加え、国土交通省九州地方整備局の海洋環境整備船による調査結果等も用いて検討を行った。

表1 検討に使用した主なデータ（底質・底生生物）

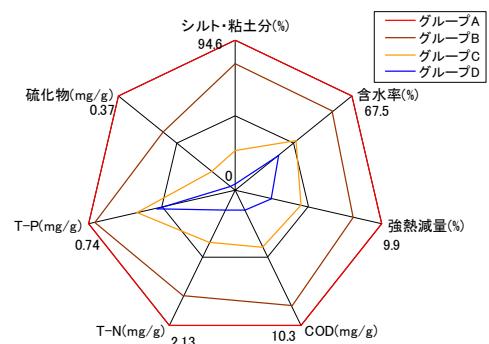
項目		2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011
海 輝	底質	○	○	○	○	○	○	○	○
	底生生物	○	○	○	○	○	○	○	○
環 境 省	底質	—	○	○	○	○	○	○	○
	底生生物	—	○	○	○	○	○	—	○

底質データの解析による調査地点分類

表1に示した底質調査で得られる調査データの共通測定項目である含水率、強熱減量、硫化物、COD、T-N、T-P、シルト・粘土分の7項目の各調査地点の年平均値(地点によって調査頻度が異なるため)をクラスター解析して、調査地点を分類した。

表2 分類毎の特徴(有明海・底質)

分類	特徴
グループA	泥質で有機物や栄養塩の堆積量が最も多い底質環境
グループB	泥分、有機物、栄養塩の堆積量が多く、グループAより泥分が少ない底質環境
グループC	砂泥質で、栄養塩、有機物の堆積が少ない底質環境
グループD	砂泥質で、栄養塩、有機物の堆積が最も少ない底質環境

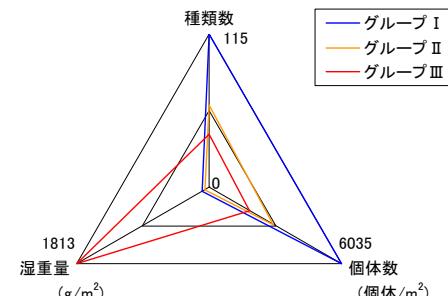


底生生物データの解析による調査地点分類

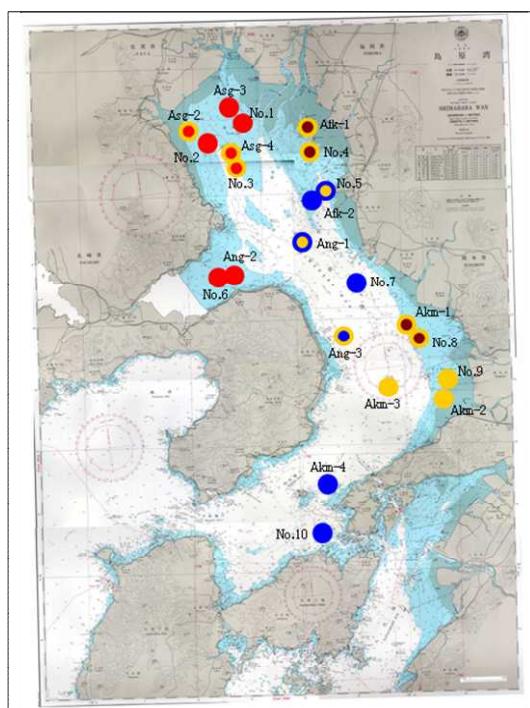
底生生物では、種類数、個体数、湿重量の3項目を用いて、底質と同様にクラスター解析を行い各調査地点を分類した。

表3 分類毎の特徴（有明海・底生生物）

分類	特徴
グループI	種類数、個体数が最も多い特徴を有する生息状況
グループII	種類数、個体数が少なく、湿重量も少ない特徴を有する生息状況
グループIII	種類数、個体数が最も少なく、湿重量が最も多い特徴を有する生息状況



以上を組合せ、有明海では、7つの区分に分類。



凡例	区分名	地点数	地点
底質分類 ↓ 底生生物分類	A-III	5	Asg-3、No.1、No.2、Ang-2、No.6
	A-II	3	Asg-2、Asg-4、No.3
	B-II	4	Afk-1、No.4、Akm-1、No.8
	C-II	3	No.9、Akm-2、Akm-3
	C-I	2	No.5、Ang-1
	D-II	1	Ang-3
	D-I	4	Afk-2、No.7、Akm-4、No.10

図1 【底質、底生生物特性からみた海域区分】

海域区分設定について

海域区分は、上記底質・底生生物特性からみた海域区分に、さらに海域再生対策検討作業小委員会の滝川委員長から提供いただいた「水質特性からみた海域区分図」、第 27 回有明海・八代海総合調査評価委員会資料から「貧酸素水塊発生状況から見た海域区分図」などを参考に 5 つの海域区分を設定した。



図 2 【水質特性からみた海域区分】

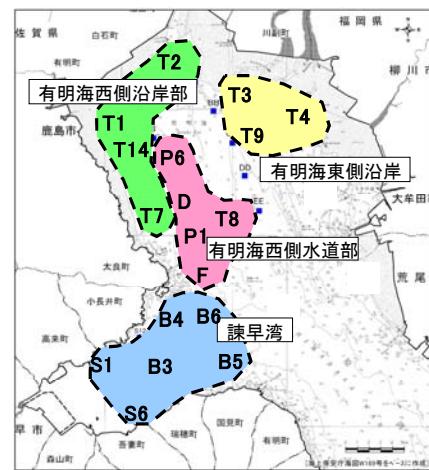


図 3 【貧酸素水塊発生状況からみた海域区

5 つ程度の海区に再構成

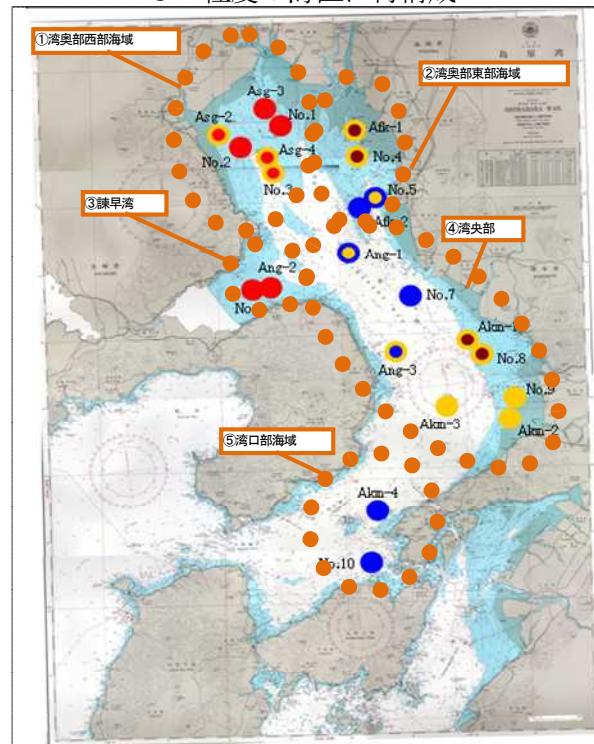


図 4 【海域再生小委員会の検討のベースとする有明海の区分図案】